

新副会頭に聞く“VIVID KYOTO”

第4回 田中 誠二 副会頭 (株)キャリアール・インターナショナル 代表取締役社長

今回の新副会頭インタビュー企画では、コロナ禍で深刻な打撃を受けている京都観光の復権と、さらなる振興に取り組む田中副会頭にお話を伺いました。

「先憂後楽」の心構えで 守りから攻めへ ピンチを好機へ

2020年4月に副会頭の職を拝命しました。13年にわたり「知恵産業のまち京都」の推進に尽力してこられた立石名誉会頭のご功績を引き継ぎ、塚本会頭の力強いリーダーシップのもと、「守りから攻めへ、今こそ、京都の底力」のキャッチフレーズを自ら実践し浸透させていけるよう、与えられた使命を全うしたいと考えています。

私は「先憂後楽」、つまり楽しいことは後回しにして、憂うべきことを先に済ませるように心がけています。まさに今、コロナ禍による京都観光へのダメージなど様々な憂いが目の前に横たわっています。オール京都の知恵を結集することで、ピンチを好機へと転換するヒントがきつと見つかるに違いありません。人類の歴史は危機から立ち上がる歴史でもありました。問題に對峙し、適切な対策を継続して講じることで、マクベスのセリフにあるように、「明けぬ夜はない」と信じています。

コロナ禍は人々の生活や社会の常識を大きく変えました。自分たちが優位性や競争力だと思っていたものが、いつそうでなくなるかわかりません。専門学校や生涯学習事業などを運営している私たち学校法人大和学園で言えば、人と人が接することで学び合い、癒しやおもてなしを提供することで豊かな生き方や新たな交流を生み出すことをなりわいとしています。それが制限され、あるいはなくなってしまうために、根底から運営モデルを変える必要がありました。

「隗より始めよ」という言葉がありますが、私が導き出した答えは、まず経営者自身がスピード感をもって、走りながら考え、学びながら行動するということです。例えば、オンラインで実施することが難しい実習授業の場合、それを実現して高い教育効果を上げるには、どんな知恵が必要なのか？学生の学びを止めることがないように、今まで大切にしてきた経営理念やミッションを問い直し、これまでの常識や価値にとらわれずに組織や部署の垣根を越え、脱構築することを恐れずに、新たな仕組みづく

りに積極的に取り組みました。

京都は日々の暮らしを大切にしながら、あらゆる分野において外部から刺激を受け入れ、既存の価値を融合させ、新たな商品やサービス、技術を絶えず生み出してきた都市です。そうしたポテンシャルを生かし、京都のまちがリーダーシップを発揮し、コ・クリエイション（共創）の意識をもって今できることを俊敏に、迅速に行動に移すことで、目の前の困難を乗り越えていければと思っています。

ダイナミックな循環を生み出す 京都型の観光モデルを 世界に発信

副会頭として、京都観光の復興に特に力を注いでいきたいと考えています。例えば、昨年度に京都で開催された国際会議の件数は過去最高でしたが、今年度は予定されていた会議の9割以上がキャンセルという厳しい状況となっています。MICE参加者の特徴は、滞在日数が長く観光消費額も高いことから、京都観光の大きなマーケットとして成長させていきたい分野で



「まず経営者自身がスピード感をもって、
走りながら考え、学びながら行動する」

す。国立京都国際会館の拡張整備も始まっていますが、オンライン会議が増えるなど目まぐるしく環境が変化する中で、世界から指名されるMICE都市としての新たな魅力を、オール京都で考えていかななくてはなりません。

一方で、アフターコロナを見据え、観光が経済発展につながるだけでなく、京都に根差す地域コミュニティや文化、環境を、持続可能なものに循環・発展させていくようなプロモーター的役割を果たすことが求められています。コロナ禍以前は、インバウンド需要が順調な反面、オーバートゥリズムの課題も抱えていましたが、観光都市として京都が目指すべき姿として、単に安全・安心な観光のまちというだけではいけません。観光振興そのものが文化・芸術を下支えることで、人や企業に創造的な感性が生まれ、活力ある経済活動や市民の暮らしにつながっていくことが重要です。「国連・観光文化京都会議2019」でも高く評価されましたが、今後の観光復興に向け



て観光事業者・観光従事者・観光客・市民が一体となって、こうしたダイナミックな循環を生み出す京都モデルを創出し、実践していきたいと考えています。

次なる100年の 伝統を生み出す ソーシャルビジネスの種を 育てる

京都商工会議所では、ベンチャーの都・京都の復権を目指して、若手起業家の育成を行う「京都・知恵アントレプレナー支援プログラム(KICAP)」に取り組んでいきます。コロナ禍を受けて私たちの生

活スタイルが一変しましたが、起業家によって生まれる新しい価値が、京都のみならず世界に向けてイノベーションを起し、次なる100年の伝統を創り上げていく。持続可能な京都の底力を継承する重要なプロジェクトだと感じて、私自身わくわくしています。

「ローマは一日にしてならず」というように、誰もが異を唱えるような夢物語も、自分の力を信じて地道に努力を積み重ねることで、妄想がやがて構想に、構想が計画に、計画が実現に転換していくのだと思います。日々の努力やプロセスを見てくれている誰かが、きっとチャンスの手を差し伸べてくれる

に違いありません。京都が育ててきた自然、文化、芸術に自分たちの事業が調和し、目先の利益だけでなく、例えば世界の人々が幸せになれる、あるいは大きな社会課題を解決に導くような、京都ならではの洗練されたビジネスが生まれることを期待しています。

私の座右の銘は「異なりを認め合い、相互に敬愛する」こと。京都は優れた個性や卓越した能力を持った人たちが集まり、互いに包容力をもって交流し、よそにはない上質や秀逸性を創り上げてきました。副会頭として、会員の皆さんの多様性を尊重し、切磋琢磨の取り組みを支援することで、塚本会頭が提唱される「VIVID KYOTO」、光り輝く京都ブランドを推進していきたいと思えます。